干拓に見る広島城下の土地開発

本　田　美　和　子（広島城　学芸員）

1　海に向かって広がった土地

天正 17（1589）年に毛利輝元によって広島城の築城が開始された。城がつくられたのは、太田川河口部に形成された三角州上である。当時、河口部にはいくつかの三角州が形成されており、城はその中で最も広い州に築かれた。そのため当地が「広島」と名付けられたのだという説もある。図 1 は当時の三角州の想像図であるが、黄金山（南区南東部：図 1 では仁保島）も江波山（中区江波南および江波二本松）も当時は島で、現在の広島市太田川河口部の土地はまだ半分以上形成されていなかったことがうかがえる。そこから築城をきっかけとして現在に至るまで、土地が南に向かって開発されていくことになる。

それは太田川が山間部から大量に運び海岸線に堆積した「土砂」を利用して行われた。人の手が加わらなくとも時間をかければ陸地になっていただろうが、人々がそこに手を加えることによって開発を進めていったのだ。その方法は「干拓」と「埋め立て」に分かれる。干拓は文字通り「干して拓（ひら）く」方法であり、浅瀬を堤防で囲い、内部の水を排除して陸地化していく。埋め立ての場合はそこに土砂を入れてかさ上げする。したがって前者は堤防外の水面より土地は低くなるが、後者は高くなるという違いがある。

広島市の太田川河口部の場合、江戸・明治時代には干拓が、それ以降現在に至るまでは主に埋め立てが行われてきている。江戸・明治期に干拓が行われたのは、そもそも干拓に有利な自然条件（遠浅の海）があったこと、埋め立てより手間がかからなかったことがあげられる。また、できた土地は耕作地として活用するのが目

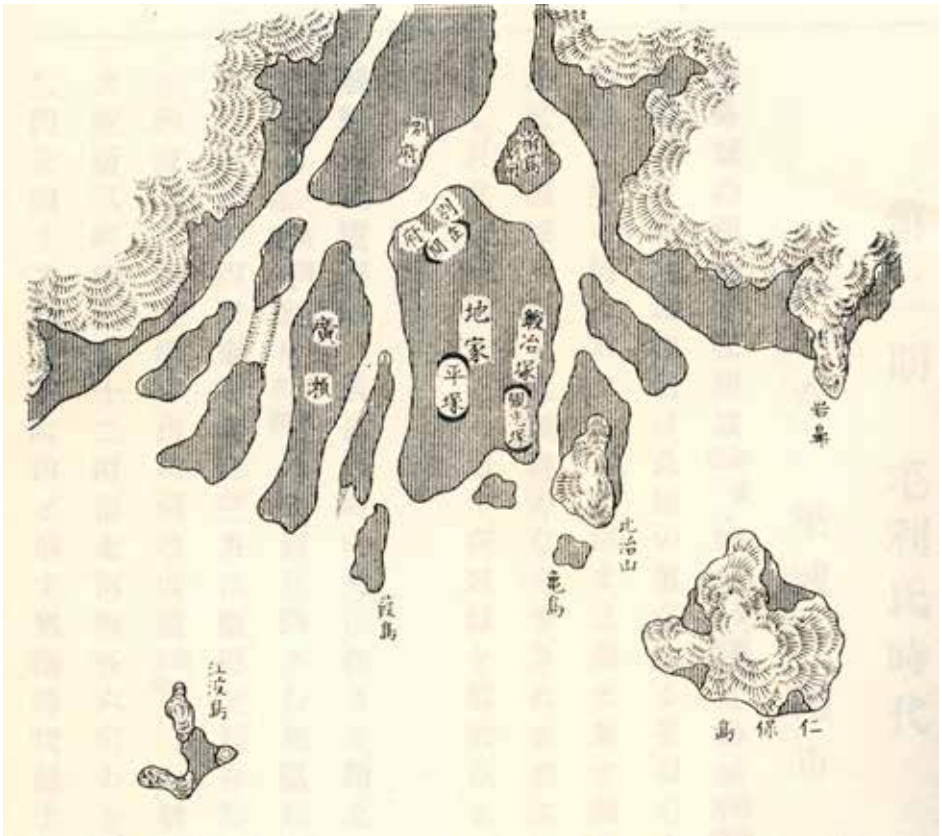

図1

的だったため、土質が均一で安定する干拓地の方が有利という事情もあったと思われる。なお、当然塩分を多く含んでいる土地を耕作地として活用するにはまずは塩抜きが必要であり、そのために広島城下で栽培されたのが、塩分に強く土壌から塩分を吸収することができる木綿であった。当時肥料として使われていた干鰯（ほしか）の原材料のイワシが瀬戸内海で多く獲れていたことも相まって、やがて木綿は広島の特産として成長していくことになる。

一方、大正時代以降に行われた土地開発のほとんどは商業港・工業港・工業用地の建設に伴う大規模なものだった。そのため、土地を海面より高く強固なものにすることができる埋め立てが行われている。なお、商業港・工業港建設の埋め立てには、周辺の海底に堆積した土砂が活用されたことが知られている。

2　繰り返された小規模干拓

さて、江戸時代を通して行われた干拓であるが、その多くはごく小規模なものであった。もちろん、藩主導による大規模な干拓も行われている。例えば、寛文 2（1662）年に行われた、元々は島だった比治山と黄金山（当時は仁保島）の間に大堤防を設け、300 町余歩（297ha）もの土地を開いた干拓事業がそれにあたる。その一方で小規模な干拓が営々と積み重ねられて土地が拓かれていったのが広島の特徴と言えるかもしれない。そうなった原因の一つとして、広島城下の排水事情があげられるだろう。

城下町が三角州と干拓地という低地に設けられている関係上、生活排水・雨水・農業用水などの排水は非常に重要な問題であった。しかし、地下水も塩分が強くて生活用水としては活用できず、その確保を川に頼らざるを得なかった事情があり、川に直接排水するのは衛生面の問題があった。そのため、城下中心部および干拓によって設けられた新開に水路を張り巡らして、最終的には南端の新開に水を集めた。そして干拓堤防に設けられていた樋門（水門）から海に向かって排水していたのである。なお、干拓地が海面より低かった関係で樋門は開閉式になっており、満潮時には閉められ、干潮時に排水を行っていた。

図2

ところで、先述のとおり、海岸線には太田川が大量に運んでくる土砂が堆積し続けていた。やがてこれを利用して干拓を進めていくことになるのだが、新しく干拓される土地は、それ以前に拓かれている新開よりも低い必要があった。浅瀬が成長しすぎると排水の悪化を招く危険性があったからだ。実際に明治時代にこれが問題になったことがある。明治 17（1884）年に宇品港の築港工事が始まり、それに伴って皆実新開の南側に形成されていた浅瀬を利用して宇品新開が干拓で拓かれることになった（図 2）。築港については多くの反対運動がおこったのだが、その一つが皆実新開の農民によるものである。皆実新開は寛文 2（1662）年に行われた大規模干拓によって拓かれた土地だが、その南側はそれ以降干拓が行われておらず、形成されていた浅瀬は海苔・牡蛎養殖に活用されていた。そのためこの浅瀬は築港時には皆実新開よりも高くなっており、皆実新開の住民は干拓が行われると排水がうまく

いかなくなることを懸念したのだ。こうした事情で、広島城下では浅瀬が成長しすぎる前に干拓をする必要があり、小規模干拓が繰り返される結果になったのではないかと思われる。

このような小規模干拓の状況は当時の絵図からも確認することができる。例えば、「承応二年御城下洪水以後所々堤高下出来絵図（以下、「承応二年の絵図」）」は、承応２（1653）年に広島城下を襲った大水害後、広島藩が行った橋や堤防の復旧工事の様子を記した絵図で、江戸時代初期における広島城下の新開の様子を知ることができるものである。また、「広島町新開絵図（以下、「新開絵図」）」は享保 13（1728）年に町奉行によって整えられた絵図で、干拓によって拓かれた新開の様子が詳細に描写されている。この二つの資料から、まず舟入村を例に小規模干拓の状況を見てみよう。

３　舟入村の場合

舟入村は現在の羽田別荘（中区舟入町 8-40）の南側から、広島市立舟入高等学校（中区舟入南一丁目 4-4）の北側あたりまでを範囲とする新開だった。まず承応二年の絵図（図３）の該当部分を見ると、すでに干拓による開発が行われており、「舟入新開」と表記されている。そして南側の干拓堤防の外には小規模な干拓が行われており、おのおのの干拓地には「舟入西新開」「舟入沖新開」「桜新開」と名が付けられている。文政５（1822）年に完成した広島城下の地誌『知新集』によると、こうした干拓地は「土手外」と表記されている。さらに同書には舟入新開の土手外の新開としては「沖新開」「桜新開」「榎木新開」が記されている。榎木新開は江戸時代中期成立の「広島城下絵図（広島市公文書館蔵）」によると、舟入新開の南西隅に拓かれているのが確認できる。

舟入新開は享保 10（1725）年に舟入村と改称したのだが、この時に土手外の新開も舟入村に編入されたと『知新集』に記されている。図４は新開絵図に描かれた舟入村の状況である。なお、舟入村の南側には描かれているのは、延宝７（1679）年に藩による大規模干拓で拓かれた舟入沖新開（のちに江波新開と改称）である。

図３

図４

さて、同図の舟入村の描写を見ると、土手外の新開を包み込む形で新たに干拓堤防が設けられており、舟入新開と土手外の新開は完全に一体化している。さらに、道の在り方に特徴があることに気づく。村の大部分の道は直線的で整然としているが、その南端の土手外の新開だった部分は曲がりくねって整合性がないのである。おそらく、舟入新開は大規模干拓によって拓かれており、したがって道も広範囲で一律に整えられた。しかし土手外で少しずつ土地が拓かれた部分は、道が入り組む形になったのだろう。この状況は戦前の航空写真でも若干確認することができるが、現在は失われている。

4　国泰寺沖新開（のちの国泰寺村）の場合

現在の中区千田町・東千田町も同じような成り立ちの土地である。この一帯は承応二年の絵図（図 5）によると、国泰寺沖新開と呼ばれていた（以下、沖新開）。その北には国泰寺新開があるが、こちらは築城期にはすでに拓かれていたと推測されている。元和 5（1619）年の浅野長晟（ながあきら）入城から間もない寛永年間（1624 ～ 1644）前期の広島城下を描写しているといわれる「寛永年間広島城下絵図（広島城蔵）」には国泰寺新開は描かれているが、沖新開はまだない。したがって、寛永年間前期以降、承応 2 年までの間に沖新開が拓かれたと思われる。

図 5 を見ると、沖新開の堤防の外には小規模な干拓が行われており、柳新開と名が付けられている。このことから、沖新開もまた小規模干拓の積み重ねで形成されたのであり、さらにこの後も干拓が続いたと推測される。

図 6 は新開絵図における該当地域の様子である。国泰寺新開と沖新開はこの頃までに統合され、大きく堤防

図 5

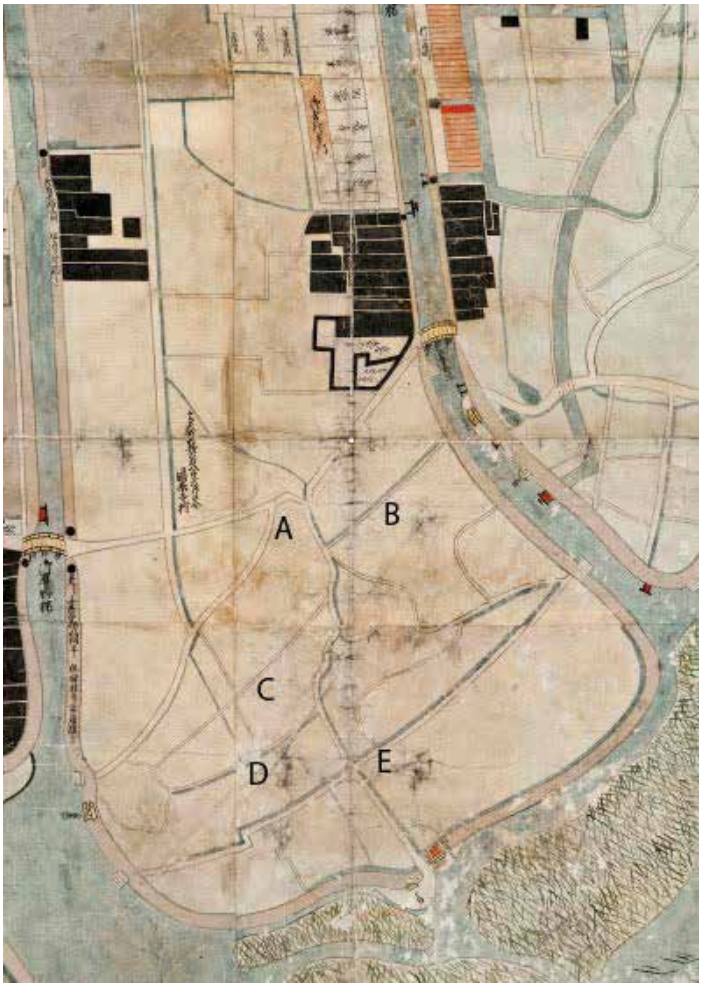

図 6

で囲まれて国泰寺村になっている。Aは国泰寺新開と沖新開のかつての境界線で、現在の国泰寺交差点・日赤病院前交差点・南大橋東詰を結ぶ街路がおおむねその位置にあたる。このAより南側、つまり旧沖新開の範囲は道が入り組んでおり、このことからも小規模干拓が繰り返されたことがうかがえる。横にややカーブして通っている道B～Eは繰り返し設けられた干拓堤防（海岸線）の跡であろう。なお、この時点での国泰寺村の海岸線は現在の広島電鉄千田車庫北側の街路としてその痕跡を残している。

この地区の道の状況は近代になっても続き、戦前の地図や航空写真（図７）を見ても、街路が入り組んでいる様子がうかがえる。しかし、戦後に区画整理が行われた結果、西側の千田町地区には痕跡は残っているものの、東側の東千田町地区では全く見ることができない。

なお、文政８（1825）年に成立した広島藩の地誌『芸藩通志』の挿絵（図８）を見ると、国泰寺村の土手外に新開が拓かれ、その沖には多くの中州が形成されている様子が分かる。この一帯は土砂が分散して堆積しやすかった状況がうかがえる。その後も干拓が進み、国泰寺沖新開と名付けられることになる（現在の中区千田町・南千田西町・南千田東町の一部）。

これらのような事情で道が入り組んでしまった状況が現在も残されている場所がある。例えば現在の中区西平塚町・東平塚町・鶴見町・竹屋町界隈がそうである（図９）。左手の「平田屋川」はかつてここを流れていた人工の運河である。点線よりも北側の街路が整然としているのに対して、南側の街路は雑然としているのにお気づきだろうか。実は北側の地域は築城期に町割がされている。町割とは前近代の日本で行われていた都市計画のことで、一定範囲の土地に複数の街路を直交する形で設け、土地を区画整備することを言う。そのため北側は街路が整然としているのだが、それに対して南側の地域は城下町建設後に小規模干拓が繰り返し行われたと考えられている場所で、そのため街路が雑然としているのである。

図7

図8

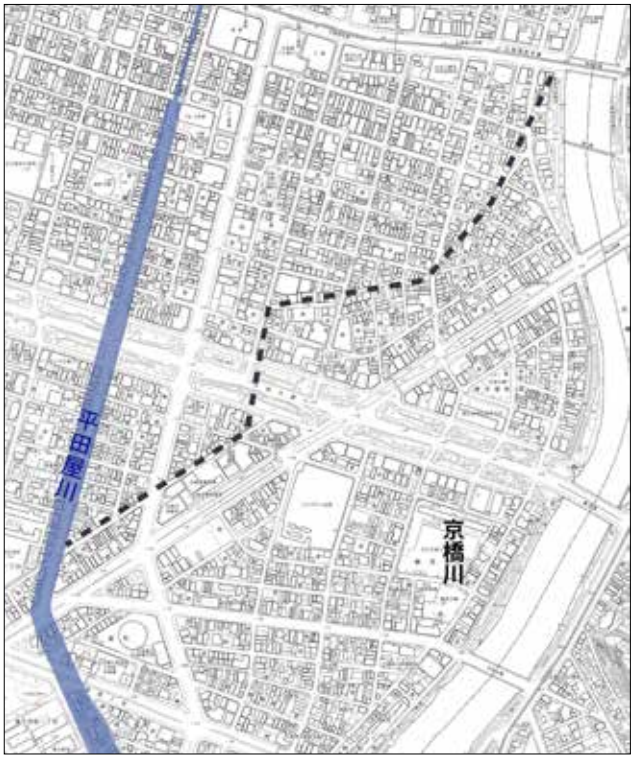

図9

5　中州の干拓

さて、新開絵図を見ると、海岸線の他に川が蛇行している場所や河口付近など流れが減速する場所では中州ができやすかったようで、こうした中州でも干拓が行われている様子がうかがえる。少しでも多くの耕作地を確保するためだけでなく、成長しすぎると川の流れを阻害する恐れがあったのかもしれない。やがてこれらの中州は陸地に取り込まれていったのだが、その痕跡を現在も見ることができる。

図 10 は新開絵図における天満川の河口付近の様子である。当時の河口は現在の南観音橋付近であった。大きな中州が四つ成長しており、いずれも干拓されている状態である。北側の①②はすでに河岸とつながっているが、南の③④はまだつながっていない。図 11 は現在の同じ場所で、前述の中州はすべて陸地と一体化している。特に②と③は当初土手外の中州として成長した痕跡をよく残している。

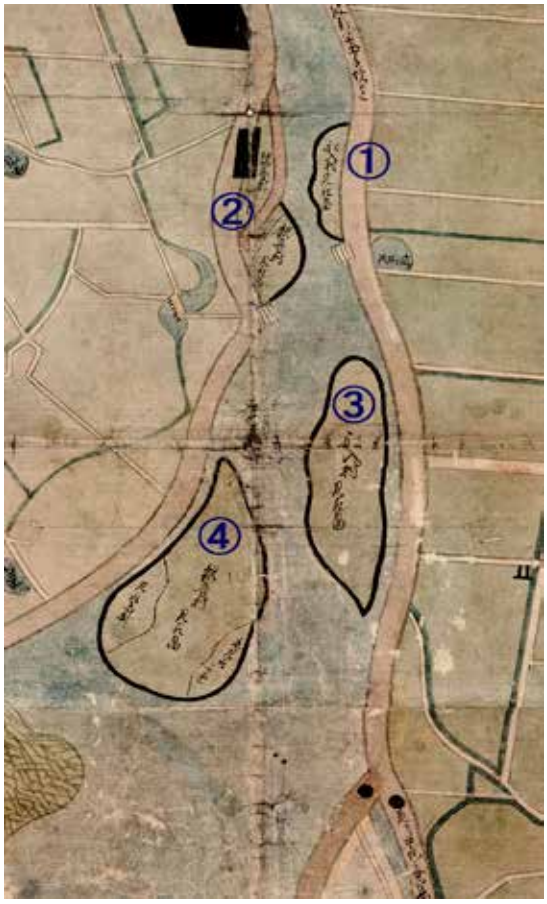

図 10

図 11

6　広島の土地開発の縮図

このように、江戸時代の人々は川が運んできた土砂を活用して、小規模な干拓を積み重ねてきたのだが、現在そうした土地開発の歴史を最もよくうかがうことができるのは吉島地区である。図 12 は吉島地区の土地開発の推定図である。①から④は江戸時代に干拓、⑤から⑧は明治以降に埋め立てが行われている。

①の水主町新開は少なくとも 3 回の干拓を経て開かれた新開である。図 13 は承応二年の絵図に描かれた水主町新開（絵図上では加子町新開）とその南端に拓かれた龍池新開（現在の広島刑務所付近）の様子である。そして図 14 は新開絵図における水主町新開で、すでに龍池新開は水主町新開と統合されている。この図を見ると、元々龍池新開であった区域には「龍池」が描かれている。当時、海岸線の干拓堤防には前述のとおり排水用の樋門が設けられ、潮の干満に合わせて開閉していた。しかし樋門を閉めている間にも北から水が集まっ

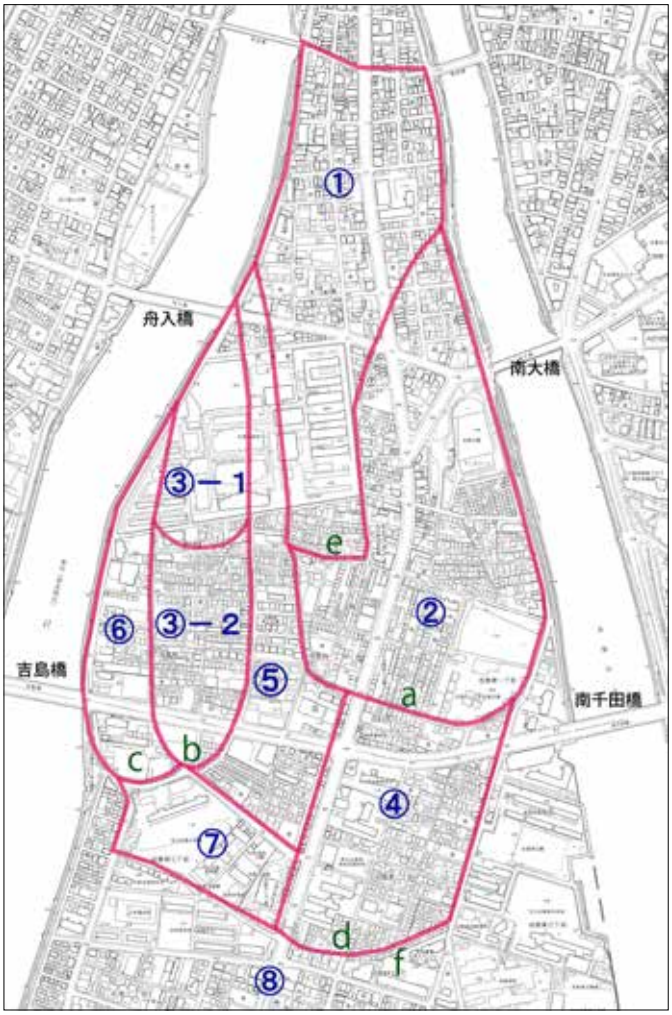

図 12

てくるため、堤防の内側に貯水できる施設を設けておく必要があった。その一つが潮廻しと呼ばれる貯水池で、龍池は龍池新開の堤防の内側に設けられた潮廻しであったと考えられる。やがて龍池新開の南でも干拓が行われ、排水用の樋門も移動した。引き続き龍池は貯水池として機能し続けたようで、新しく設けられた樋門に向かって水路が設けられており、その様子が新開絵図に描かれている。やがて時期は分からないが三つの新開は一体化して水主町新開と呼ばれるようになったようだ。

図 13 に戻る。龍池新開の東側には中州が形成されており、すでに干拓がされ「吉島新開」と表記されている。これは現在の吉島公園付近にあたる。図 14 をみると、時期は不明だがこの新開を内包する形で干拓が行われており、全体として吉島新開となっている。元々あった吉島新開はのちに拓かれた土地と比べて土砂がかなり堆積した状況だったようで、現在もその高低差は吉島公園内に残されている。

さて、図 14 を見ると、水主町新開西側の本川中にすでに干拓されている中州（図 12 の③－ 1 ）がある。これは開発者の名前をとって「大洲屋

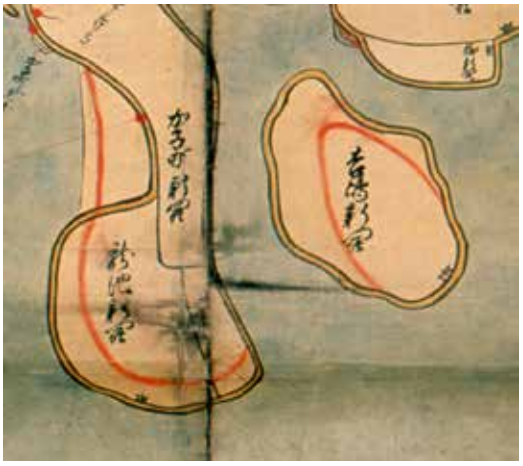

図 13

図 14

新開」と呼ばれていたが、行政的には水主町新開の一部とされていた。この段階では中州はさほど大きなものではないが、後にその南側に土砂が溜まり、さらに干拓が行われて拡大している（図 12 の③－２）。

開発年代は不詳だが、幕末までには吉島新開の南側に吉島沖新開（図 12 の④）が拓かれている。結果、図 12 の①・②・④と③－１・２の間には龍川と呼ばれる流れができた。この川は明治初頭に埋め立てられ、龍川開（図 12 の⑤）と呼ばれた。さらに大洲屋開の西側（図 12 の⑥）の部分が埋められ、明治開と呼ばれた。明治 27（1894）年に大日本帝国陸地測量部が測量した地図ではすでに龍川開・明治開を確認することができる。図 12 の⑦の部分は昭和 5（1930）年発行の「最新広島市街地図（驕々堂旅行案内部発行）」を見ると、堤防が築かれて下水溜留池となっている。さらに昭和 15（1940）年発行の「番地入り大広島市街地図（金正堂書店発行）」を見ると埋め立てにより規模が縮小しており、昭和 20（1945）年 7 月に米軍が撮影した被爆直前の航空写真では完全に埋め立てられているのが確認できる。

そして、昭和 15（1940）年からは広島湾の工業港建設の一環として、南側に広がっていた浅瀬を活用して埋め立て工事が行われた（図 12 の⑧）。最初は工業港として開発される予定だったが、昭和 18（1943）年になって陸軍の意向により軍用飛行場となった。そして戦後もさらに埋め立てが行われて、現在の形になっている。

このような複雑な土地開発が行われた吉島地区には、各新開が拓かれた時に設けられた干拓堤防の痕跡が残されている。干拓堤防は開かれた土地よりも高い。干拓が進むと堤防は海岸から離れ陸地に取り込まれていくのだが、そのまま土手道として残された。時を経て町の開発が進むとその多くは高低差を失っていくのだが、道としてその痕跡を残している。広島城下の干拓堤防の特徴として、直線的ではなく曲線的であることが挙げられる。これは干拓が自然に堆積した土砂の形状を利用して行われたことに由来していると思われる。そのため干拓堤防の名残の道は弧を描いていることが多い。吉島の場合、図 12 のａ～ｅに弧を描く道が残されており、特にｂとｃは急カーブになっている。

また、図 12 のＥとＦには堤防の高低差も残されており、Ｅについては吉島稲生神社の境内に、Ｆは宅地や道になっている。高低差が残されている干拓堤防は他の地区でも見ることができるが、それなりの規模だったものであり、脆弱であったと思われる小規模干拓のそれは残されていないようだ。現在、最も堤防としての形状がよく残っているのは、前述の寛文 2 年に行われた大規模干拓の堤防である。

7　干拓地での水害

ところで、どんなに強固につくった堤防でも自然の猛威の前に決壊してしまうことがあり、新開絵図にはその痕跡も描かれている。図 15 は観音村の様子で、その堤防の内側には貯水池が設けられており、大池と表記されている。貯水池の役割については前述の通りだが、この貯水池は人工的とは思えない形状をしている。おそらくは堤防が切れて水が一気に新開に流れ込んだ際、流水が地面を侵食することによってできた窪地だと思われる。この他、城下には数か所にこうした貯水池が見られ、寛文 2 年の干拓堤防ですらも例外ではない。なお、明治時代に台風による高潮で堤防が切れた際の被害の記録があり、それによると、現在の市営桟橋付近で堤防が 100 mにわたって決壊し、宇品新開全域が一面海のような状況になった。さらにこの時決壊した部分は干潮面以下約 3.9 mの深さでえぐれ

図 15

ていたという。水の勢いのすさまじさが分かる記録である。

それならば小規模干拓の場合もしばしば堤防は切れていたものと思われ、その痕跡も新開絵図に描かれている。図 16 は先ほどの図 15 よりやや北側の観音村内の様子である。興味深いのは、その池の多さである。そのうちの一つは「切レ口池」と命名されていること、『知新集』の観音村の項に「観音村の土手外に拓かれた高瀬開には寛政 8（1796）年の洪水の際に堤防が切れてできた池が二つある」という記述があることなどから、これらの池は堤防決壊後にできたものであると思われる。小規模干拓で拓かれた土地を維持することの大変さが伝わってくるようである。こうした事情もあり、これまで見てきたように、干拓の積み重ねである程度の土地ができると、それをさらに堤防で囲んでいたのだろう。

こうした人々のたゆまぬ努力により、現在の広島市の基礎はつくられている。そのことを肝に銘じ、今後とも調査を続けていきたいと考えている。

図 16

図 1　五箇庄の推定図 『広島市史』第一巻掲載　広島市公文書館画像データ提供
図 2　明治 27（1984）年の宇品港周辺の様子 「大日本帝国陸地測量部　明治 27 年測量・明治 29 年発行　1：20000 地図」より　国土地理院蔵
図 3　舟入新開の様子 「承応二年御城下洪水以後所々堤高下出来絵図」より　広島市立中央図書館蔵
図 4　舟入村の様子 「広島町新開絵図」より　広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵
図 5　国泰寺新開・国泰寺沖新開の様子 「承応二年御城下洪水以後所々堤高下出来絵図」より　広島市立中央図書館蔵
図 6　国泰寺村の様子 「広島町新開絵図」より　広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵
図 7　戦前の国泰寺村（当時は千田町）の様子 「昭和 14 年 12 月 6 日　陸軍撮影航空写真」より　国土地理院蔵
図 8　国泰寺村沖の様子 『芸藩通志　第六巻』より　国立公文書館デジタルアーカイブデータ提供
図 9　現在の中区西平塚町・東平塚町・鶴見町・竹屋町界隈 「広島市平面図（2500 分 1 地形図）」（平成 29 年度更新）より作成　広島市都市整備局都市計画課データ提供
図 10 天満川河口付近の様子 「広島町新開絵図」より　広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵
図 11 現在の新観音橋・南観音橋付近 「広島市平面図（2500 分 1 地形図）」（平成 29 年度更新）より作成　広島市都市整備局都市計画課データ提供
図 12 吉島地区土地開発推定図 「広島市平面図（2500 分 1 地形図）」（平成 29 年度更新）より作成　広島市都市整備局都市計画課データ提供
図 13 水主町新開・吉島新開の様子 「承応二年御城下洪水以後所々堤高下出来絵図」より　広島市立中央図書館蔵

図 14 水主町新開・吉島新開の様子 「広島町新開絵図」より 広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵
図 15 観音村海岸線の貯水池の様子 「広島町新開絵図」より 広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵
図 16 観音村内の池の様子 「広島町新開絵図」より 広島市市民局文化スポーツ部文化振興課蔵

参考文献

・『広島市史 第 1 巻～第 4 巻・社寺誌』 広島市役所編・発行 大正 11（1922）年～ 14（1925）年（昭和 47（1972）年に名著出版により復刻）
・『新修広島市史 第 1 巻～ 7 巻』 広島市役所 編・発行 昭和 33（1958）年～ 37（1962）年
・『図説広島市史』 広島市公文書館 編・発行 平成元（1989）年
・『史跡広島城跡資料集成 第一巻』 広島市教育委員会社会教育部管理課 編・発行 平成元（1989）年
・『広島城下町絵図集成』 広島市立中央図書館 編・発行 平成 2（1990）年
・展示図録『広島城絵図集成』（財）広島市未来都市創造財団 広島城 編・発行 平成 25（2013）年
・展示図録『「広島町新開絵図」にみる浅野時代の広島城下』 広島市郷土資料館 編・発行 令和元（2019）年